

所長だより第47号 平成28年7月11日

# 希望の船

We love BIWAKO

「みずうみに 学んで世界の 明日をみる」

滋賀県立びわ湖フローティングスクール  
〒520-0047 大津市浜大津5丁目1番7号  
<http://www.uminoko.jp/>

## 「小さな命の大きな循環」

【所長 青木 正士】



昨年度から県水産課と連携して取り組んでいる活動として、ニゴロブナの放流活動があります。今年度も6航海で、この放流活動を実施します。

ニゴロブナは、びわ湖の固有種で、古来びわ湖の中で独自の進化を遂げてきた魚です。同じく固有種のゲンゴロウブナ（ヘラブナ）に似ていることからニゴロブナというのですが、私たちの生活とのかかわりでは、ずいぶん違った印象があります。

というのも、ニゴロブナはびわ湖特産の「ふなずし」に使用される魚だからです。「ふなずし」は、日常よく食べている江戸前寿司とは異なり、「なれずし」といって漬物のように塩や米とともに樽に漬け込み、発酵させて旨みを増し、独特の味わいを楽しめる珍味です。まさしく、びわ湖が生んだ食文化で、今もお祝いの席などで振る舞われています。

しかし、このニゴロブナの漁獲量は、昭和40年ごろには500トン程度あったそうですが、その後、平成元年には178トン、平成9年には18トンにまで減少してしまいました。このため、びわ湖産のニゴロブナの流通量が減少し、今では「ふなずし」を口にすることが難しい状況となっています。

どうして、こんなにニゴロブナの漁獲量が減ってしまったのでしょうか。ニゴロブナは、内湖や入江のヨシ帯などで産卵します。稚魚はヨシ帯などで生育し、その後、びわ湖の沿岸から沖合へと移動し、やがてびわ湖の深い所で過ごすようになります。生まれて2～3年で全長30cm程度に成長し、さしあみ漁やたつべ漁などで漁獲されています。そのサイクルの中で、近年は産卵するヨシ帯や魚道の減少、稚魚を捕食してしまうオオクチバスなどの外来魚の増加、漁師の減少などが漁獲量減少の原因と考えられています。

県水産課では、減少したヨシ帯を復活させる取組や、魚道を確保して水田で稚魚を育てる取組、天敵の外来魚などを駆除する取組、そしてニゴロブナを産卵・孵化させ稚魚を放流する取組をしています。放流体験では、生きた魚を直接触る経験に乏しい子どもたちが多く、稚魚を触ると「ぬめり」やヒレのところがった感触に戸惑う様子が見られます。でも、このぬめりがフナの体を細菌などから守る重要な役割をしていると教えてもらえると、触り方にも優しさがあふれてきます。「元気に大きくなってほしい」という思いを込めて、びわ湖に放流していくのですが、波打ち際からどのように放流すればよいか、また戸惑う子どもたちです。

波の合間に一歩出て放そうとすると靴が濡れてしまう、波から離れて放そうとすると稚魚が砂まみれになっている、遠くに投げるのはかわいそう、いろいろ悩みながら精一杯放流する姿がすてきでした。砂まみれになっている稚魚も、次の大波で水の中に入り自分でびわ湖に泳ぎ出していました。

子どもたちの放流した小さな命が、びわ湖の中で循環し成魚となって再び私たちの元に戻り、滋賀の誇る「ふなずし」となって食卓を飾ってくれることを願っています。

